

集団づくりの“原則”と楽しい指導のアイデア

瀬成田 実

* 編集部注

以下は瀬成田さんがY中学校の校内研修で話した時のレジメです。
その時使用した数種の別紙資料は入れておりませんので、それも
知りたい方は研究センターか瀬成田さんにご連絡ください。

<はじめに>

□わたしの自己紹介

○×ゲーム、○○先生のプロフィールなど

□いまの子どもたちをどう見るか・・・みんなで考えてみましょう

今どんな子どもが増えているか→ひとことで言うと

A

子ども



今の子どもに必要なことは何か→ひとことで言うと

B

※A 不安 B 安心

◇どんな子どもが増えているか

自分に自信のない子・自己肯定感の乏しい子、感情を言葉で表現できない子、自暴自棄の子、
自分の思い通りにならないとイライラする子・すぐキレる子、異質な子どもと交わらない子など

* 「中1の1割が“うつ”」という衝撃的なニュース（2007年10月9日河北新報）

◇背景にあるもの

～子どもの荒れ・不登校、青少年の非行・無差別殺人などの原因を構造的に探る

複眼的な目で子ども分析を・・・私たちの“子ども観”や“社会観”が指導の前提

- ・社会・経済的な視点→新自由主義の広がり、自己責任論の蔓延、ネット・ケータイの普及といじめ・犯罪、不安定労働と格差社会（→相次ぐ若者による無差別殺人）
- ・家族の視点→暴力、貧困、過干渉⇔ネグレクト、モンスターペアレンツ・クレイマー（“自子中心主義”）、親子間の相互不信（→殺人への発展）
- ・学校の視点→競争の広がり（→中高一貫校の登場、学区の撤廃、私立進学コースによる生徒の争奪戦、塾の過熱化など）、能力主義（習熟度別）の広がり

例→いじめ問題を見る視点…社会・経済的な視点→「貧困と格差」

家族の視点→「成育歴」「親子関係（親の成育歴や親の苦悩も含む）」

学校の視点→「管理と競争」「友人関係」

◇今子どもに必要なこと

子どもに「“安心”できる“居場所”」をつくること

◇そのために子どもに育てたい力

- ・自己肯定感（「自分も値打ちのある人間なんだ」ということを体感できること）
- ・他者と平和的に共存する力
（「みんなちがってみんないい」といった異質共同の世界を築けること）
- ・自治の力（提案=要求し、討論し、実践し、総括することができること）

◇学校や大人（教師）はどうあるべきか

- ・大人や教師が子どもにとって“信頼できる他者”として存在すること
- ・学校が競争や管理ではなく、“自治や連帯を培う場”、“人権が尊重される場”であること

1 出会い…発見と再発見～集団ゲームで楽しく

集合ゲーム

バースデーライン

自己紹介ビンゴ

自己紹介トス など

2 集団づくりの“原則”と実践の工夫

(1) 集団づくりとは

違った(異質な)者どうしが共通の関心と利益をめぐって話し合い、ある事柄で合意し、合意したことで「共同の活動」が生まれ、活動をとおしてお互いが「かけがいのない存在」であること(お互いの価値)を確かめ合う関係をつくりだすこと。

集団づくりを簡潔に言うとは…→「〇〇〇と〇〇〇を△△△いとなみ」

「学級づくり」は「集団づくり」の核となるもの。しかし近年、子ども集団が学級だけではなく、部活動、委員会をはじめ、教科、選択、総合と多様化しており、集団づくりが必要な“場”は増えている。

(2) 班づくり

① 班はなぜつくるのか

人間はみな公的、私的な組織やグループの中で生活している。学級における「班」は子どもにとって公的な組織であり、学習や活動の基礎集団である。生活面では子どもにとって基礎的な「居場所」となる。子ども集団では、当然、同質ではない他者との間で様々な問題が起こるが、「班」は、それを克服し、異質な者どうしが共同していくための“学びや体験の場”として重要なものである。

② 班の人数・・・生活班は学級の人数や必要に合わせてよい

*学習班は3～4人がよい。→静岡県富士市立岳陽中の実践の紹介

③ 班活動の工夫～楽しい班レク・班活動を～ 学級・学年活動や授業でもつかえる

- ・にほんブログ村じょう ・聖徳太子(ステレオ)ゲーム ・新聞切り抜き文章作りゲーム
- ・新聞丸め競争 ・言葉集めゲーム ・逆さ言葉ピンコンゲーム・仏様 ・集団ジャンケン
- ・団結の樹 ・漢字しりとりゲーム ・神様ですか? ・紙皿回し大会
- ・発見班会議…班員の一人ひとりにみんなから「がんばった点」を言ってやる。

・**自慢班会議** …班員が一人ずつ順に「自慢したいこと」をみんなに話す。

*発見班会議と自慢班会議は学級発見(自慢)大会に発展できる。

<学級自慢大会のやり方>

- ① 「例：今年一年・・・」を振り返り、班員が一人ずつ順に「自慢したいこと」をみんなに話す。
- ② 班で一番すばらしい、感動的な話をした人を選ぶ。
- ③ その人の話を、同じ班の別の人がその人になりきり、学級全員の前で演技力豊かに発表する。(各班代表者が発表する)
- ④ 誰の話がもっとも感動的だったか、クラス全員で挙手して一人を選ぶ。
- ⑤ 「その人は誰でしょう。立って下さい。〇〇さんの話が今日の“感動大賞”です。みんな拍手を送りましょう」

④ 班替えの方法

- 1) あなたは年何回、班替え(席替え)をしていますか?→ 回くらい
- 2) 席替えの方法は→ア、教師が決める イ、くじ・あみだなど ウ、ご対面方式
エ、好きな者同士 オ、希望を取り、教師が調整
カ、希望を取り、リーダーが調整 キ、リーダー(班長)が決める
ク、その他

3) 班がえはどんな時にするのか

- A 前もって班替えの時期を定めていたり、行事など、取り組む課題が明らかになっていてその目標を達成した時。
- B 班と班の差が固定化し始め、それにより集団全体が停滞し始めた時。
- C 班長以外にもリーダーが育ってきて、班替えにより、そのリーダーを班長にして集団をより発展させていきたい時

- ・偶然(くじなど)は避ける。教師が決めるというのも避けたい。集団が育たないから。リーダーを中心に学級集団が高まるよう指導する。
- ・最終的には「班長立候補制」と「班長による班編成」が理想

(3) 討議づくり

① 討議・討議はなぜ大事か

民主主義は、話し合いが基本である。自治的な活動における集団の意思決定にあたっては、十分な討議が必要不可欠である。

また討議は、子どもどうしが、ある事柄(テーマ)をめぐって価値論争することである。その中でさまざまな価値がぶつかり合い、自分なりの考え方を創っていくという重要な教育的営みである。

② 「対話・討議」と「討議」のちがい

対話・討議・・・話したこと、話し合った事柄を決定とせず、“合意”となる方向に重きが置かれる。決めるわけではないので、行動はそれぞれの意識と工夫になる。しかし、意識が生まれると大きな力となっていく。行動の強制はできない。

討議・・・参加している人数で決定数を定め(過半数、全員一致制など)、“決議・決定”が行われる。様々な意見を出し合い、考えあって、決定していく。決定した場合には守らないといけない。

対話・討議で大事なこと・・・

- 1) まずは子どもが声を出せる教室にする。そういう雰囲気のを教師がつくる。発言がないのは子どもが悪いのではなく他に原因があるという認識を。
- 2) 教師が話を“聞き取る”、“読み取る”。
- 3) 子どもが意見を出しやすいテーマで。
- 4) 子どもが自分の考えを生み出せるようにしていく。
- 5) 子どもが決意(自己決定)をすることができるようにする。
- 6) 一人の子どもの声、思い、考えを他の子(大人)につなげていく。
- 7) 小さな進歩も大きく評価しつつ。

討議で大事なこと・・・

1) 原案づくり

討議は決定が前提なので“原案”が必要になる。原案は子どもたちの様々な思い（要求）の入ったものにする。

発議と原案づくりは誰でもできる。個人、班、班長会、有志、教師など。慣れるまでは用紙が原案をつくとよい。

<* 1 原案づくりのポイント>

<* 2 どんなものが学級会の議題（原案）となるか>

2) 要求の引き出し方

班会議などで子どもたちの思いや要求を引き出す。アンケートも要求を知る上で大切。子どものささやき・つぶやきも。

3) 討議の原則

「みんなで決めてみんなで守る」が原則。決まったら自分たちで守ろうと努力する自治的な取り組みをさせる。守れないことは決めない。

*ただし、今日的には『決定』→『守れ!』は結構難しい。ゆるやかな決定、問題があれば決定しなす etc といったゆるやかな決定が必要か。

4) 円滑に討議を進めるスキルを高める

時間厳守の習慣化と要求権を教える。

「〇分で話し合ってください」と議長が時間を制限し、時間が足りなくなった班には「〇分、時間延長を要求します!」と要求させ、全体の承認を得て、時間を延長するようにする。

5) 討議の二重方式の採用・・・班→全体→班→全体・・・

学級で大事なことを決める場合は、班で話し合ってから全体討議をする。学年や学校全体に関わることを決める場合は、学級で話し合ってから全体討議する。このような二重討議方式を採用すると、思考や認識が深まり、決定事項に対するやる気（行動力）も異なってくる。

6) 採決法

→班に深く関わることや班で十分話し合った時は「班一票制」で決めるとよい。

→「個人一票制」の多数決には「過半数採決」、「3分の2採決」、「全員一致制」採決などがある。

*決議の形態としては、十分な討論を経、少数意見者の「条件付き賛成」を保障した上で「全員一致制」を採るのが望ましい。しかし、これは時間がかかるし、現実的には大変難しい。

少数意見を尊重しながら、合意を形成していくのであれば、一般的な「過半数採決」でよい。

採決での確認は、対立（意見が真っ二つに分かれる）が明白な場合は“挙手法”（または投票）で、そうでない場合は“拍手法”で行う。

7) 採決のタイミング

一般的には、議論が尽くされたとき、採決の同意が得られたとき、賛成派・少数派双方の歩み寄りが見られたときなどである。

③ 「議長」への指導の重要性

「やってみせ、ともにやらせて、やらせてみる」が原則

・「やってみせ」…教師が議長でないと子どもが安心しない。まずはお手本を見せ教えることが大切。

・執行部（提案者）と議長の区別を

例・・・学級会や〇〇実行委員会で、提案者と議長を同じ子にさせることは避ける。

*「議長」と「司会」は異なる

「議長」は、学級総会・生徒総会など成員が一堂に会して討議し、決議する会で、討議をリードし、指導する任務を負う者のことであり、伝達などを目的とした“集会”の「司会者」や進行係とは性格が違う。

私が担任をしていた当時、朝の会や帰りの会は、1日の目標を決めたり、総括したりする場だと位置づけ、「司会」ではなく「議長」に仕切らせていた。

④ 実践例の紹介・・・学級会や生徒総会での討論

(4) リーダー指導の重要性

班づくり、討議づくりなど、あらゆる活動をとおしてリーダー指導を重視したい。いま、子どもたちが“群れ”ていることや、リーダーが弱い、いないということが問題になるが、その原因として考えられることは以下の点であろう。

- 1) 総合学習、選択教科、習熟度別授業にみられる学習の“個別化”
- 2) 子どもを主体とした自治活動（児童会活動・生徒会活動）や行事の減少・削減
- 3) 話し合い活動の減少。その裏にある、教師・子どもの多忙化。→何でも教師が決めてしまう。子どもに頼らない・・・

できる子とできない子、やりたい子とやりたくない子、活発な子と自己表現のできない子、いじめっ子といじめられっ子・・・がいるのが集団。そこではリーダーが必要になる。

リーダーとは難しく言えば「班あるいはグループの発信と応答の関係を読み取ることができ、それをさらに広げようと行動することができる主体性、つまり、他のメンバーの『わたくし』を公共とつなげて認識できる主体性を持った子どものことである。」（全生研編：子ども集団づくり入門）

少し平たく言えば、集団内の個々の人間の意思や要求を公的な空間（学級など）の中で読み取り、行動を組織していける人間といたらよいだろうか。

今日のリーダー指導にあたっては次のことを大事にしたい。

＜リーダーを育てる10のポイント＞

- ① リーダーが活躍する“共同の活動”を学習や生活面でつくりだす努力をすること。
- ② リーダーには他の子どもと**別様の行動が求められる**ことがあることを自覚させること。
- ③ 最初は教師がリーダーに。そして、次に一緒にやるようにすること。（「やってみせ」→「共にしてみる」という二段階指導）
- ④ 広く豊かなリーダー観を持つこと。
 - 1) 様々なグループの中で影響力を持っている者
 - 2) 知性、特に言語が豊かで、相手の感情も言語化できる者
 - 3) ある程度の他者性を認め合えるリーダー経験を持った者
 - 4) 運動能力、発言力、理解力、行動力のある者 etc
- ⑤ 活動ごとに評価、賞賛をきちんと行うこと。（→「**四つの拍手**」は有効）
- ⑥ 子どもの力を信じて、思いっきり任せること。
- ⑦ 楽しい活動を生み出すこと。
- ⑧ オールマイティなリーダーは求めない。リーダーの任務を限定して呼びかける。
- ⑨ 1年間の見通しの中で、段階的、計画的にリーダーを育てていく。
- ⑩ 有志の活動を増やし、自主的集団の中でリーダーを育てていく。

* 四つの拍手・・・行事や研修のフィナーレなどを感動的にしめくくる演出

「起承転結」を基本に・・・

(例) 起「実行委員のみなさんに送ります。立って下さい。」

承「班長のみなさんに送ります。・・・・・・」

転「・・・(意外な人、陰で成功を支えた人など)・・・に送ります・・・」

結「全員に送ります・・・・・・」

(5) 教師のイニシアティブですぐできる実践のいろいろ

- ① 学級地図・・・子どもの関係を図に書いてみる
- ② 掲示物の工夫・・・子どもの成長と学級の歴史がわかる掲示板に
- ③ 朝の会、帰りの会の工夫・・・拍手のあるクラスに
- ④ 「みんなは一人のために」の精神でできること・・・まごころ宅配便、予想問題づくりなど
- ⑤ 班ノート・個人ノート
- ⑥ ハイタッチ・・・・・・すれ違った時、さりげなく。
- ⑦ 授業に集中させる1分でできるゲーム・・・フラッシュゲーム、剣道ゲーム、脳の活性化ゲーム
- ⑧ ほめること・認めること・・・**ふわふわことば・ちくちくことば** ←*親業のアクティビティ
→私の生徒賞賛法・語りかけ法
 - ・ほめる時はできるだけみんなの前で クラスや職員室で・・・
 - ・他者の賞賛を伝えると子どもはもっと喜ぶ 例「□□ちゃんが喜んでたよ」
「△△先生もほめてたよ」
 - ・大人しく目立たない子は、ちょっとした行為を学級通信で大きく取り上げる
 - ・帰りの会で「今日の拍手」
 - ・授業で、個人や集団を時に大胆に、時にさりげなく評価

(6) 子どもの自主性・自治の力でぜひ取り組ませたいこと ～行事は集団を成長させる～

- ① □ 合唱曲を作ろう・・・・・・自治を大事にしたわたしの6年前の実践～

「3の1だけの、このメンバーだけの歌 市民会館に響け!～オリジナル自由曲～」

・・・行事に自治的に取り組むと、子ども一人ひとりや子ども集団は飛躍的に成長する

- ② 学級レク・班対抗レク(賞状・賞品も用意して)
- ③ 班学習・助け合い学習、予想問題づくり
- ④ ○○さんのお別れ会、○○さんのミニ激励会、受験激励会
- ⑤ ○月の誕生会
- ⑥ 体育祭、球技大会、合唱コンクールご苦労さん会

*ぜひ、飲み食い付きで。できればみんなで調理して。ふだん“手を焼いている子”ほど張り切る。

<子どもの力を引き出す指導のポイント>

- ・教師の願いを語る
- ・子どもと信頼関係をつくる
- ・子どもの力を信じて頼る
- ・子どものやる気を引き出すアプローチと励まし、援助

<行事指導のポイント>

- ・昨年度と違う工夫を一つする。
- ・教師と子どものそれぞれの集団で合意をつくる。目標(めあて)を決める。
- ・リーダーを育て、リーダーがイニシアティブをとれるように指導する。

*復活北中祭「ドラマを生み出す文化祭はやめられない」

(7) 「学級・学年通信」の役割・意義と作り方

～学級通信は、ほめて、認めて、子どもの力を引き出す【最高の武器】～

- ・子どもと親と教師をつなぐパイプ役→信頼関係づくり
- ・子どもに対する観察眼が鍛えられる
- ・子どもと学級の成長の記録となる

*わたしの学級通信の売りは「わが子の誕生記」

*学年だよりは3年分を製本して卒業生に配布

＜通信作りのポイント＞

- ・子どもの生の声や活動を紹介
- ・目立たない子にもスポットを
- ・呼びかけ、問題提起も随時
- ・保護者の参加も

(8) 「課題を持つ子」を核に据えた集団づくり

ADHD など軽度発達障害の子どもや荒れている子、孤立している子、いじめられている子を「課題を持つ子」と括るとすれば、「課題を持つ子」と他者との関係づくりは集団づくりの今日の重要な課題といえる。いいかえれば、マイノリティ、弱者、異質な者との“共同”が大切だということである。困難が伴う実践だが、わたしたちが追求しなければならない重要な取り組みと言えよう。

大和久勝（元小学校教師）は、「軽度発達障害の子を“困った子”ではなく“困っている子”ととらえよう」と“子ども観”の転換の重要性を訴えている。そのような子どもを大切にし、その子どもを核に据えた集団づくりをすれば、他の子どもの自立も促され、集団は成長するのではないだろうか。

具体的な実践構想としては

- ① 不登校の〇〇ちゃん、障害を持つ□□くんへのサポート隊をつくろう。（学習支援、生活支援）
- ② すぐキレル◇◇男、孤立している△△ちゃんについて班長会議で対策や支援策を考えよう。
- ③ 道徳や学活で、「権利の教育」「エンカウンター」の授業を行い、人権意識を高める。

アクティビティの一例＜自己理解・他者理解、発見・再発見、感受性など＞

- ・アイデンティティの競売=夢の商品オークション
- ・熱気球が危ない
- ・ジャガイモさんとお友達
- ・信頼して倒れてみよう
- ・クッキーデート
- ・**ディスクリマドット**

など

→イギリスやフランスの人権教育『ヒューマンライツ』楽しい活動事例集：
（明石書店）や『エンカウンターで学級が変わる part2』中学校編（国分
康孝：図書文化）などを参照

- ④ 学活や道徳で「命」や「人権」の授業をやろう

私の実践例・・・「ホームレス殺人事件を起こした中学生について」（2002年2月）

- 1)この少年はどんな人間？
 - 2)ホームレスは弱者か
 - 3)どうしたらなくなるか
- 「相次ぐいじめ・自殺の現実を見つめる」（2006年11月）

- 1)命とは
 - 2)この子はどんな子？
 - 3)どうすれば自殺しないですんだと思うか
- *2学期には、「秋葉原殺人事件」を取り上げてみたいと考えている。

すぐキレル、暴力をふるうなど手のかかる子がいる場合は、特別支援委員会、生徒指導委員会などを管理職とともに行い、教職員が協力共同してその子どもに関われるようにする。専門機関

や専門的な知識をもった人にアドバイスをもらうことも大切。担当教師一人が悩まないような集団指導体制をつくる。

＜課題を持つ子への指導のポイント＞

- 教師の苦闘以上に子どもは苦悩していることに共感すること。
- 本気で向き合い、子どもの要求を受容しつつ、子どもに要求すること。
- 指導が困難な子どもの場合は、校内に対策委員会を立ち上げ、教職員の集団指導体制をつくる。担当教師一人で悩まない。
- 発達障害を持つ子であれば専門機関や専門的な知識を持った人からアドバイスを受ける。

＜おわりに＞

- ・子どもの苦悩に共感できる教師に・・・対話を大事に
子どもの行為・行動には必ずワケがある。「どうしたの？」という語りかけが大事。
- ・共感しつつ、子どもに要求できる教師に
- ・学級をどの子も安心できる場所に
- ・子どもとの信頼関係づくりをとおして、教師は信頼できる「他者」の一人になる。
子どもは見ている・・・この先生は自分のことを理解してくれるかどうか、と。
教師の「教師くささ」と「人間くささ」・・・子どもは敏感に感じ取っている。
- ・教師一人で背負わない、担任だけで背負わない・・・職場に“同僚性”を
～教師のストレスは計り知れない。うつ病や早期退職者が出るのも当然。教員評価や免許更新制、学習指導要領の改訂がそれに拍車を。
～だれにも得手・不得手があるし、今日の教育をめぐる厳しい環境は一人では乗り越えられない。
得手の部分を最大活用、苦手な部分は他の人に頼ろう。
困った時は「困った!」と言おう。悩みを打ち明けられる仲間を持とう。疲れたときは休もう。
集団づくりは、生徒だけではなく、その前提として教師の“共同”の人間関係づくり（職場づくり）を大切に
- ・「親との共同」を大切に
～どんな親も話せばわかる。批判的な親ほど強い協力者になる可能性がある～

【対立から共同へ】

・・・保護者から向けられてくる激しい非難や攻撃をすべて自分の非、自分の責任として受けとめるのではなく、「その人が今、自分の中では抱え込みきれない生きづらさをこうして表出しているのだな」と理解することで、適切な距離をとって自分を守ることも大切になってきます。・・・（現代社会の中で生きる人々の）怒りや憎しみの感情は二次的な感情であり、そのもう一歩手前には傷つきや悲しみの感情が存在しているはず。そして、悲しみや傷つきの感情は、それが等身大に感じ、表現され、応答されていくときには、それは他者との“つながり”を回復していく力でもあります。・・・教育・保育現場に向けられてくる激しい攻撃も、子どもたちが自らの傷つきや生きづらさをいじめや暴力として表出してしまっているのと同様に、保護者自身が抱えている生きづらさや葛藤の表出でもあります。・・・
（『「気になる保護者」とつながる援助』『対立』から「共同」へ～より抜粋 楠凡之著：かもがわ出版）

*参考図書

『貧困襲来』湯浅誠（山吹書店）

『学級づくりハンドブック』（月刊「生活指導」8月臨時増刊号 2008年8月 全生研編：明治図書）

『「気になる保護者」とつながる援助』～「対立」から「共同」へ～（楠凡之著：かもがわ出版）

『子ども集団づくり入門』～学級・学校が変わる～（全生研常任委員会編：明治図書）
『エンカウンターで学級が変わる part2』中学校編（国分康孝：図書文化）
『「ADHD」の子どもと生きる教室』（大和久勝著：新日本出版社）
『困った子は困っている子「軽度発達障害」の子どもと学級、学校づくり』（大和久勝著：クリエイ
ツかもがわ） ほか

（宮城県教職員組合・書記長）